

開館 15 周年 ジョルジュ・ルオー 聖なる芸術とモデルニテ

パナソニック汐留ミュージアム（新橋） 2018.09.29～12.09

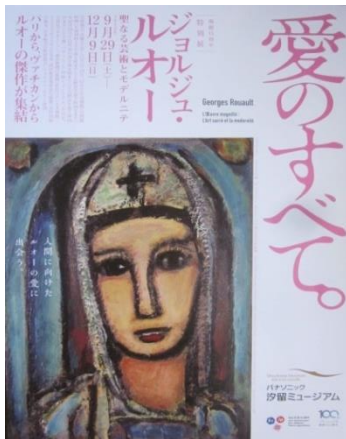
「ジョルジュ・ルオー」（1871～1958）は、20 世紀のフランスを代表する画家で、本展では画業の軸である「聖なる芸術」に焦点を当て、画伯が目指した「愛のかたち」を紹介している。敬虔なキリスト教徒であった画伯は、生涯にわたって「受難」や「キリスト像」などの宗教主題の作品を数多く描いている。

本展の見どころは、「ヴァチカン美術館」の所蔵作品が初めて日本に出品されることであり、《秋またはナザレット》（1948 年）、《聖顔》（1933 年）、《パックス平和》、七宝作品の《聖心》（1951 年）の“4 作品”が注目されている。

さらに「ポンピドー・センター・パリ国立近代美術館」からは、《聖顔》、《ヴェロニカ》、《受難（エッケ・ホモ）》、《エジプトへの逃避》、《キリスト教的夜景》の「5 点」が、更にルオー財団などから《サラ》、《我ががジャンヌ》、《キリストとの親しき集い》などの代表作「約 40 点」が来日している。

展覧会は国内の《聖顔》や「聖書の風景」も合わせた油彩画「約 90 点」が終結し、ルオー芸術の集大成で“人間に向けたルオーの愛に出会う”とされる。

《ヴェロニカ》 1945 年 油彩/カンヴァス



一般的には、《ヴェロニカ》をモチーフとした絵画の大部分の作品は、キリストの絵が浮かび上がった布を手にする女性が描かれているが、画伯は“頭巾をかぶった顔をやや傾け、大きな目で前を見据えて額に刻まれた十字架の表情”を強調して描いている。

この「ヴェロニカ」の黒く塗りつぶされた瞳、長い鼻、小さな口といった特徴は、「聖顔」として描かれたキリストに瓜二つで、キリストの顔をそのまま女性化したようなイメージに見えて修道女を思わせる。

《秋またはナザレット》 1948 年 油彩/カンヴァス



温もりの光の中に家族が集い、愛に満ちた親密な雰囲気にも包まれて、樹木と塔と山の稜線が生み出す安定した構図の画面に、色と形がよく調和して、画伯独自の宗教的幻想が広がっている作品である。

「ナザレット」は、キリストが幼少時代を過ごした懐かしの場所のことである。